

朝日選書

355



朝日新聞社編

世界名作の旅

上

朝日新聞社編

世界名作の旅 上

朝日選書 355

世界名作の旅 上

朝日選書 355

1988年6月20日 第1刷発行

定価1200円

編 者 朝 日 新 聞 社 編
発 行 者 八 尋 舜 右
印 刷 所 共 同 印 刷
製 本 所 和 田 製 本
発 行 所 朝 日 新 聞 社



〒104-11 東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

©Asahishimbun 1988 Printed in Japan

装幀・多田進

ISBN 4-02-259455-1

目次

カミュ 異邦人

ホメーロス 『イーリアス』と『オデュッセイア』

メリメ カルメン

ドストエフスキー 罪と罰

アンデルセン アンデルセン童話集

マイアーフェルスター アルト・ハイデルベルク

セルバンテス ドン・キホーテ

チェホフ シベリアの旅

アラビアン・ナイト

テクジュペリ 夜間飛行

3

13

34

44

53

63

71

81

102

113

ヘミングウェイ キリマンジャロの雪

ゴーゴリ 外套

マルロオ 希望

ヘッセ 車輪の下

モーム 雨

マルタン・デュ・ガール チボー家の人びと

トルストイ アンナ・カレーニナ

ゲーテ 若きウェルテルの悩み

ミツチエル 風とともに去りぬ

ワルタリ エジプト人

シング 海へ乗りゆく人びと

蘇東坡 赤壁の賦

サガン 悲しみよ こんにちは

122

134

143

152

161

198

212

226

234

242

250

258

266

イプセン	人形の家	275
ダンテ	神曲	282
スタインベック	怒りのぶどう	290
老舍	駱駝祥子	299
モンテーニュ	随想録	307
コッローディ	ピノッキオ	315
コナン・ドイル	バスカビル家の犬	323
シラー	ウィルヘルム・テル	331
ジード	田園交響楽	339
スチーブンソン	スチーブンソンの復活	346

「世界名作の旅」は、昭和39年11月から昭和41年8月まで、朝日新聞に連載され、昭和41年、朝日新聞社から単行本（全四巻）で刊行されました。

世界名作の旅
上

アルペエル・カミュ

異邦人

はじめに——アルペエル・カミュ（一九一三—一九六〇）は、アルジェリアのモンドビーに生れた。父はフランス人の出かせぎ労働者、母はスペイン系の婦人だった。アルジェ大学哲学科を出たが、生活のため自動車部品売込み、船舶ブローカー、市庁吏員、測候所員など職を転々とし、最後に『アルジェ・レピュブリカン』紙の記者となった。論説が認められ『パリ・ソワール』紙に迎えられる。ナチの侵入でアルジェリアへ戻り、オランの中学校で教員をしながら抵抗運動に参加、この間に小説『異邦人』、哲学的エッセー『シジフオスの神話』を書きあげた。『異邦人』が出版されるや、サルトルに激賞され、一躍文壇に出た。続いて戯曲『誤解』『カリギュラ』を発表、戦後は『コンバ（闘争）』紙の主筆に推されて活発な言論活動を展開、一九四七年、大作『ペスト』を発表して名声は世界的となった。翌年『コンバ』紙を退き、ガリマール書店の『希望叢書』監修者となり、一九五七年にはノーベル文学賞を受賞。ようやく円熟期にさしかかったところで自動車事故のため死んだ。四十六歳だった。

生への絶望と生への愛情、それはそのまま生と死に対する人間の条件である。カミュはこれ

を不条理と呼ぶ。このなかからカミュの「反抗」が生れる。『シジフォスの神話』や『反抗的人間』で彼が展開したけんらんたる論理もその「反抗」にあった。『異邦人』はその文学的結晶にほかならない。

主人公ムルソーはアルジェに住む平凡なサラリーマンである。母一人息子一人の暮したが、もうだいぶ前からママンは養老院に行ってしまった。ムルソーは毎日事務所へ出勤し、帰るとアパートで無為の日々を過ごしている。

「きょう、ママンが死んだ。もしかすると昨日かも知れないが、私には分らない。養老院から電報を貰った。ハハウエノシライタム、マイソウアス。これでは何も分らない。恐らく昨日だったのだろう……」

小説はこうして始り、平凡な、無感動な、一人の男ムルソーが倦怠のなかで、アパートの隣人と知合い、やがてそのケンカ仲間に引きこまれ、何の動機もなくアラビア人を射殺してしまういきさつを語る。そして、逮捕され、死刑の宣告を受けたムルソーが一切の虚偽、一切の感傷のベールから自由に自分を主張しながら生涯を閉じるところで終る。彼は最後まで世間の人たちにとって「異邦人」であつた。文中の引用は『異邦人』は窪田啓作氏訳、『ペスト』は宮崎嶺雄氏訳による。

オランは退屈な町だ。白いビルと黄色い家。ヤシの並木と太陽。緑の地中海と裸の台地。強烈な光と濃厚な影。そして真昼の深い倦怠。この町で私は四日暮した。フランス風のしゃれたガリエニ通りを歩き、市庁前の広場に腰かけ、昔のアラビア人地区をうろつき、海につき出たサンタ・クルースの

山腹まで登った。それでも日は暮れない。また町へおり、午後の日を照り返している白いリセ（中学校）の横をぬけた。むかしのカミュはここで教師をしていた。『そのころの生活から、この町を舞台にした『ペスト』という小説が生れた。』

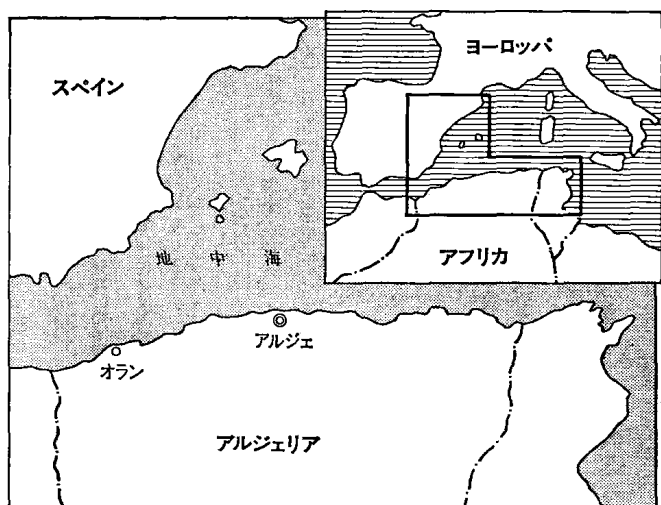
ある朝、医師リユーは診療所の階段にネズミが一匹死んでいるのを見つける。やがてネズミの死体がいいたるところで発見されるようになる。学校にも、病院にも、レストランにも、警察にも、電車の中にも。人びとがようやく大量のネズミの死体に不審を抱き始めたころ、不思議な熱病が流行しだした。死亡者は徐々に、やがて急激にふえ、ついに市の疫病課は医師を集めて病状を検討する。だれも口にしないが、それはもう明らかだった。ペストだ。ペストがついにオラン市を占領する。市は疫病地区であることを宣言し、市の門は閉ざされ、住民はもとより、旅行者も、犯罪人も、すべての人びとがこの町に監禁される。恐怖におののく市民に神父は「これこそ神の課した試練だ」と説く。その中で医師リユーだけが黙々と、ただ黙々と、いつ果てるともないペストとの戦いに献身するのである。ある日、まるで潮が引くようにペストは終息する。市の門は開かれる。市民は歓喜に酔い、やがてまたもとの生活にもどってゆく。ただリユーだけが憂愁に閉ざされながら、こう考えるのだ。

「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもない。それは数十年の間、家具や下着や穴蔵やトランクや反古の中に辛抱強く待ち続け、そしてある朝、ふたたび人間に不幸と教訓をもたらすために、どこかの幸福な町を襲うだろう」

ペストは何の象徴であろうか。どう考えるかは読者の自由だ。カミュは、この作品で医師リユーを通じて、「不条理」と戦う人間の姿をシジフォスに似せて彫刻したのである。

いた。私は逮捕された。

二人に連行されてどこまでも歩いた。黄色い家並みをぬけ、その奥の灰色の貧弱な建物の前で二人



かつて神々はシジフォスに、重い岩を山の頂まで運びあげるといふ罰を科した。シジフォスは懸命に岩を頂上まで運んでゆく。運びあげたとたん、岩はふもとまでころがってゆく。シジフォスはまたやり直す。何度も何度も、永遠に。カミュはシジフォスに人間の姿を見たのだ。

日曜の朝。いつものように私は市庁広場に出、ガリエニ通りを下り、海ぞいの道に出た。海岸通りからながめるオラン市がいちばん美しい。青い空と緑の地中海が、まぶしい光の中で溶けている。かすかな潮風。ふりむくと、海につき出たサンタ・クルースの岬の上に城塞がそびえ、その土色の城壁がムーア人への郷愁に沈んでいる。それをカメラに収めた。とたん、両側から茶色い腕がぐっと出て、私の手首をむずとつかんだ。目の鋭いアラビア人が二人、私を左右から囲んで

は「はいれ!」といった。入口に消えかかった文字があつた。「アルジェリア警察署」。

部屋はひどくきたなかつた。二人は、やせてヒゲをはやしたアラビヤ人刑事の前に私を連れてゆき、小声でなにかいった。刑事は写真雑誌の映画ストーリーを読みながらきいていたが、きき終ると古ぼけた卓上電話を回し、小声で話し始めた。そして「いま検事が来るから待つてろ」といって出て行った。二人は私を緑色のイスにすわらせ、部屋の入口で監視しだした。

沈黙の一時時間が過ぎた。二時間過ぎた。一匹のハチがひび割れたガラス窓にぶつかつてうなつてゐる。私はぼんやり、あのアルジェリア戦争で、何千という人間がやはりこうして、こんな部屋でこんなふうになすわらされていたんだらうと思つた。カミュの『異邦人』の主人公ムルソーも、こんな部屋にいられていたんだらうとも考えた。

さらに一時間たつた。日の光が窓の向うの黄色い壁を一尺以上も動いた。ヒゲの刑事が戻つてきた。「検事はいつ来るのか」と私はきいた。彼はふたたびダイヤルをゆくり回し、話を始めた。そして下手な英語で「あと二分だ」といった。四十分たつた。やつと足音がした。背の高い、色の白い、背広服の男が現れた。

ところが、彼は私に一ベツもくれず、私を連行してきた二人を尋問し始めた。歩ける場所を見つけては、そこを行ったり来たりしながら二人を、さかんに詰問している。二人の顔が次第にゆがみ、やがて不眠そうに出て行った。検事はやつと私の方に向き直り、たどたどしい英語でこういった。

「実は……あの二人は、学生なのです。城塞が軍の施設だもんで……気をきかしたつもりであなたをここへ連れてきたらしい……」

彼は汗をふく。

「しかし、あの通りから写真を撮っても差支えない。お引取り下さい」

私は外へ出た。奇妙なサイレンがうしろで鳴った。検事が追いかけてきて、パトロールカーに私をのせ、ホテルまで送ってくれた。町には夕暮れの黄色い光があふれていた。ヤシの影が次第に歩道に溶けて、オランの美しい、退屈な一日が、ようやく終ろうとしていた。

敏感な旅行者におすすめする。アルジェに行くなら港の掩蓋の下でアニス酒を飲みなさい。朝の漁場で、とれたばかりの魚を炭火で焼いて食べなさい。リイル街の小さなカフェでアラビア音楽をききなさい。アラビア人の墓を訪いなさい。カスバの屠殺街で煙草を吸いなさい。

(アルベール・カミュの『夏』より)

朝焼けの中をアルジェへ飛んだ。にわか雨が通ったらしく、アルジェは海と空の間でまっ白に洗われていた。『異邦人』の主人公ムルソーはこの町のアパートで、深い倦怠の中で生きていた。母親は養老院で死んだ。母は養老院へ行った最初のころはよく泣いたが、それは習慣のせいだった。数カ月たってこんどは養老院から連れ戻したら、ママンはまた泣いたろう。これもやっぱり習慣のせいだとムルソーは思う。彼には好きな娘もいたが、結婚してくれといわれると、こういった。

「そんなことには何の重要性もないが、そう望むならいっしょになってもかまわない」

ムルソーは平凡な男だが、自分の感情と感覚にだけは忠実に従った。自分を偽ることだけは最後まで

で拒否した。そして、おなじアパートのやくざな男となくなかかわりあい、浜辺でアラビヤ人を何の動機もなく射殺してしまう。まったく何ということもなく。「自分が回れ右をしさえすれば、それですむ」と思ったのだが、「太陽の光にふるえている砂浜がうしろに迫っていた」。アラビヤ人があいくちをぬいた。乾いたごう音とともにすべてが始り、すべてが終った。太陽のせいだった。

彼は死刑を宣告される。処刑の前に司祭がきて「神におすがりなさい」と説いた。彼は、神なぞ信じない、希望なんぞいらぬ、さっさと消えて失せろ！ と司祭を追返し、精根つきで眠ってしまう。やがて——顔の上に星の光を感じて目をさます。夜と大地と潮のにおいが、こめかみをさわやかにし、「眠れる夏のすばらしい平和が潮のように」彼の中にしみこんでくる。そのとき、ムルソーは久しぶりで死んだママンのことを思い出すのだ……。

ムルソーは「不条理の英雄」なのか。それとも唾棄すべき性格破産者なのか。それをめぐって広津和郎、中村光夫両氏の間にはげしい論争が行われた。もう十数年も前のことだ。たしかにムルソーはつまらぬ青年だった。けれど最後まで自分に正直で、そのために死んでゆく。それはカミュが、このアルジェの風物の中に散文詩でつづったキリストであった。

私は、情報省の役人ケシャイリ氏と町を歩く。アルジェは坂の町だ。道はカタツムリの背のようにグルグル回り、頂へのぼってゆく。普通の町とは逆に、カタツムリの背をおりてゆくほど高級地区となる。おりつくしたところが地中海だ。私たちはカミュのすすめる通り、小さなカフェで、いつ果てるともないかすれたアラビア音楽をきいた。政庁広場のベンチにすわって、真白な布で全身を包んだ

女たちがあとからあとから通るのをながめた。白い石が青い空にびったり貼りついたように見える高台の墓地をたずねた。見あげる急坂に黄色い石を積んでそびえるカスバの、血のしたたる屠殺街でタバコを吸った。そして、この町がカミュの小説に描かれているのとまったくちがっていることを発見した。変っているはずである。アルジェリアには、かつて百万のフランス人が住んでいた。いまはもう六、七万人しかない。カミュが愛したミシュレ街はデイドウシュ・ムラド街と名前も変っている。きり立った石段をのぼる。その両側にアラブ人が「逃れられず」に生きている。フランスから独立はしたけれど、彼らはまだ貧しさから逃れられないのだ。十万人がカスバのこの石の箱の中で、胸のむかつく臭気の中で生きている。往来に布地を広げ、声をかぎりに叫んでいる男、ガラクタを並べた市場、そこらじゅうに血だらけの内臓をぶちまけた屠殺街、ロバのなき声、石段をあえぎながらのぼる老人……私はそっとケシャイリ氏をうかがった。彼は苦行僧のように青いひたいに汗を浮べ、一言もいわなかった。さらにその横につながっている別の石段をのぼる。激しい太陽はいつかまどろみ、地中海を淡く染めている。にわかにおりてくるアルジェの夕暮れは、まさしく「憂愁に満ちた休息の一時」であった。

翌日。ケシャイリ氏は私を作家同盟へ連れて行った。「あなたはカミュに異常な関心をお持ちだが、カミュはフランスの作家です。それよりこの国の作家に会って下さい」というのだ。彼は黒いアラビア服をまとい、小柄で、病身のように青く、ほおにひげをはやしている。足を病んでいるのだ。アルジェリア戦争のとき、民族解放戦線（FLN）の組織に加わって戦ったが、そのことについては何も語らない。思い出すのもいやなのであろう。

作家同盟はカスバの下、ほこりにまみれた建物だった。私たちは粗末な木のイスに腰かけ、長いこと待った。「おかしいな。時間を約束しておいたのに」とケシャイリ氏はいった。さらに三十分待った。ついに彼は立ちあがった。「何か都合が出来たんでしょう。会えなくて残念でしたね」

そして、私が会はずだった作家のかわりに、こんなことをいった。

「いまアルジェリアにとっていちばん大事なのは農業と工業です。イデオロギーもなにもかもあとまわしだ。人間なみの生活をするというのが私たちの第一の課題なんですよ……」

街角でケシャイリ氏と別れた。世界で最も強力な敵「貧しさ」と戦っているケシャイリ氏のやせた肩に西日が強く当たっていた。

その足で私は『アルジェ・レピュブリカン』紙へ回った。カミュはかつてこの新聞の記者をしていた。主筆アンリ・アレグ氏は、アルジェリア戦争のとき秘密軍事組織(OAS)につかまり、拷問を受け、あの戦慄の記録『尋問』を書いた。キズのあるひたいを片手で支え、彼は論説に手を入れていた。

「カミュ……」といて、しばらく思いにふけていたが、やがて静かに語り出した。

「カミュはこの新聞の最初の論説委員でした。反植民地運動に声援を送りました。しかし……あなたは『異邦人』をどうお考えですか？『ベスト』を？」

アレグ氏は私の方に向き直る。

「カミュは医師リユを描きました。不断に戦う英雄を。けれど彼は私たちの独立戦争には何の力に